キャンプ原論序説

関　隆晴

僕にとってＦＩＷＣとは、次に書いていくような世界を感じさせた場であり、人間の社会の移り変わってゆくべき方向を示した場であった。だから今「僕のＦＩＷＣ」というものを表わそうと思っても、ＦＩＷＣは、もはや一つのサークルでも集団でもなく、僕の動きをすべて含みこんだ場としてあるため、文章で表わすことはできそうにもないし、又逆に何について書いても、僕のキャンプを表わすことになる　そんな気もしている。だから、ここに、ＦＩＷＣというものに関して文章で書き表わすということは、「僕のＦＩＷＣ」が、いやが上にも概念として、頭の中に作り上げられるということになり、実際の、「僕のＦＩＷＣ」の虚像として、形を与えられてしまい、全く無意味になってしまいそうな気がする。しかし、僕の書いてみたかった事でもあるし、僕の口から出たことばに対する責任の上からも、今は書くことを選ぶ。この上はできるだけ「ＦＩＷＣ」の形を表わさないように気をつけると共に、書き表わされる内容そのものより、むしろ今、こうして書いているということの方に、重みをかけているということをまず書いておこう。

さて、どう書きだしていいものやら困っていた。だが、たまたま、この机の上にあった計算用紙を裏がえしてみると、『花のＦＩＷＣ・ＣＡＭＰＥＲ募集』と書いてあり、この紙は僕が一昨年の春、阪大でのサークルのオリエンテーションの際もらったビラ。このアジ文の中の文句と、あの時上映された、夏ロングキャンプの８ミリの中で、一人の男と女が、天秤かついでイエローワークをしていたのを見て、キャンプに行ってみようかなーと思ったという由緒あるビラ。誰の文章か知りませんが、これも何かの縁、一つこの文章を下敷きにして、「僕のＦＩＷＣ」を表わしてみよう。

花のＦＩＷＣ　ＣＡＭＰＥＲ　募集

（フレンズ国際労働キャンプ）

ＦＩＷＣは、他のサークルが使うきまり文句「合格おめでとう」などというヘドの出そうな言葉を使わない。君達の積み重ねてきた苦労をたった七文字で肩がわりさせようなんぞ考えるのは、いかにも新入生をバカにした言葉だ。

一昨年一番最初この文を読んだ時、たぶん、何とキザなことを

書く奴等だろうと思ったことだろう。いかにもＦＩＷＣは他のサークルなんぞとは違うんだぞ、という感じを匂わせているようであるが、しかし僕はキャンプとの関わりの中で、「言葉」に対して、関心を持つようになっていった。たとえば、この　＜「合格おめでとう」＞という言葉にしてもどれだけの内実をもった「ことば」であろうか。この言葉の中にどれだけ『＜君達の積み重ねた苦労＞そのもの』を感じさせる力があろうか。まさにここに、ありのままの事象、物に対する「肩がわり」「代理人」としての「言葉」の性質がよく暴露されていると思える。どんな簡単な一つの「物」であっても、それを僕等がとらえようとする時、その物を言葉で表わすことによりいわばそれそのものの代理人という形でことばとして僕等の頭に入ってきているのではないか。実際僕等は、僕等のいままでの「苦労」とまでいかなくても「生活そのもの」を、何という言葉で表わし得るだろうか。今あなたが読んでいる「雑誌」、ないしは「紙の冊」、あるいは、「活字」かもしれないが、それさえも「それそのもの」を、そのまま表わすにはどう言えばいいのだろうか。僕等はふだん何の疑いもなく「言葉」によって物を表現し、名付け、その「言葉」をかわすことによって、理解したり、気付いたりしてはいるが、「言葉」そのものは、あくまで「代理人」なのであって、その「表わしている」ものそのもの」、たとえば「雑誌そのもの」ではない。「言葉」というものはそういうものではないのだろうか。ところが、「言葉」という奴は、「ものそのものの世界」では「代理人」でしかあり得ないが、僕の頭の中においては、「言葉」でなければ、主役は務められず、そこにおいては、「言葉の世界」が構築されるのであろう。だから僕等は皆「ものそのものの世界」に生きていながら、「言葉の世界」からながめているそんな二つの「土俵」の上に同時にいるという状態なのではなかろうか。

僕がニューキャンパーだった頃、キャンプの連中の会話というのは、話しをしながら、その話しの内容とは別のところで、話し合っているような、そんな感じをうけた――これは何もキャンパーの会話にのみ限られたことではなかろうが――のも、「言葉」のこういった性格の由でもあったのだろう。＜君達の積み重ねてきた苦労をたった七文字で肩がわりさせようなんぞ考えるのはいかにも新入生をバカにした言葉だ。＞異議なーし。

さて大学に入ってしまった新入生の君、今何を考えている？若し君が問題意識の片われでも持っていて、何かやってみたいなぞという浮気の虫を心の中に潜ませているのなら一度ＦＩＷＣというサークルをのぞいてみたまえ。

ところがさて、「ものそのものの世界」の「代理人」である「言葉」がここに至るや、「僕自身」を「言葉の世界」へひきずりこみはじめた。僕は今や「新入生の君」なのだ　と同時に、「新入生」になるや否や、「言葉の世界」の中での様々な規定をも受けはじめるのである。僕は大学へ入ったばかりであり、将来どこ

かの大会社へ就職するか、又は研究者になるであろう等々…そこでは「僕自身」が「ことばの世界」にとらえられることによって、「今の社会」の中での位置付けをされるのでもある。まさに「今の社会」とは、「言葉の世界」の上に成り立っているものであるということができる。例えば、一軒の「家」であっても、大学と呼ばれたり、工場と呼ばれたり、家庭という名をつけられたりすることによりはじめて「今の社会」内で意味をもってくるのであるし、役割も果せるのである。また、人間と人間の関係においても、法という名のとり決め、あるいはつくられた価値基準により保たれて「今の社会」を形成しているのである。また、沖縄へ行こうと思えば、一九七二年までは、身分証明書だとか、ビザだとかいうものをもらわないと行けないのだが、果して、国家とか、政治とかいうものは、どれだけの内実をもったものなのであろうか。「ものそのものの世界」においては、全く仮空のものでしかないと思える。しかし、この、いわば仮空の上の「今の社会」も、少なくとも現在の時点では人間が複数で生活してゆく以上、必然的に、でき上がってくるものと思える。なんとなれば、僕が他人に、ある一つの「もの」を示そうとする時、その「もの」は、「ものそのもの」としてではなく、「ことば」として伝えるのであるし、「ものそのものの世界」における「僕自身」として、やろうとすることと、別の人における「僕自身」のやろうとすることがかち合った時、そこで二人の間に、とりきめがつくられてくるのであるから。そして、はじめは必要によってつくられ、当事者が、納得して守ったきまり、当事者にとっては、きまりに従うという行動を自からとったことになるのだが、このきまりが、頭にあるいは文ででも残った以上、次からは、きまりが人間の行動を規定しはじめる。そうすると僕自身「今の社会」の一員であり、また、ものをことばとしてとらえているのではあるが「僕自身」は不自由さというか、嫌悪感を感じてくるのである。つまり、「ことばの世界」の中にではなく、「ものそのものの世界」にいる「僕」があるのであり、むしろそちらに「僕の本体」があるのである。では、「僕の本体」は何かというに「それそのもの」をことばで表わすことはできないのであるが、例えば、僕にとって絶対確実なものは何だろうかと回りをながめる時、本にしろ、机にしろ、ラジオにしろ、木にしろ、山にしろ、何一つそこにそれがあるのだと、絶対的に言い切れるものは何一つないのではないか。僕なぞ、近眼で方向音痴なのだが、富士山はどの方向にでもありうるし、目の前の鉛筆にしても、メガネをかけた時とはずした時で全く異った形になる。僕自身の中においてさえこのあり様ならば、僕以外の人の富士山の方角または鉛筆の形はどんなものか、見当もつかない。つまり、この鉛筆一つにしても、僕にとらえられた像としては確かにあるが、それの絶対的な姿すらもつかみえないのである。ではこの世のものすべて仮空のものかというと、そういった、鉛筆なり富士山なりをとらえ、考えている「僕自身

というものが、確かに在るものとして、まさに感じられてくるのである。僕にとって、「僕自身」とは絶対的に存在しているものでなければならないのである。となると、こんどは鉛筆なり僕以外の人、僕にとっては絶対的に存在するとはいいきれないがその人にとっても、彼の「僕自身」つまり一人称で呼びうるものが絶対的に存在するのであろうということはすんなりと受け入れられるのである。つまり、僕自身も他のあらゆるものも一人称となるそれそのものとして「存在を許されたもの」という感じで単独に存在しているのである。ところが、単独であると同時に、それらすべて、あらゆるものが、実に巨大な秩序を形成し「生命のるつぼ」と表現しうるような状態の中で、一つに溶けあって存在しているのである。それは「植物」によってとらえられた「太陽エネルギー」が「ほとんどの生物」の「エネルギー源」であるし、「動物」の吸う「酸素」は「植物」の出す「酸素」であること、又「動物の屍」を「養分」とした「植物」を食って「動物」が生きているように、地上のあらゆる「有機物」「無機物」から成る「食物連鎖」すべての「動植物」が生まれながらに、ある「法則性」のようなものにそって、「成長」してゆくことにより、全体として「生物界の秩序」が保たれていること、又「僕の体」は厳密に、どこからどこまでだと「境」をきめ得ない、あるいは「死」と「生」の厳格な区別すらできないという点をとっても、あらゆる点で、そういうことが感じられるのである。つまり再度要約すると僕も、彼も一人称として「存在を許されたもの」として単独に、しかも生命のるつぼと呼びうるような巨大な秩序の中で一つに溶けあって存在している、そういうものとして、「僕の本体」は説明しうるのである。だから、まさに自由な、しかもその巨大な秩序と共に、不断に変化しているものとしてあるのである。だから、前のような「今の社会」の決り、糞をする場所さえも定めようとする決りに対し、不自由さなり嫌悪感を感じるのである。しかし、僕が人間である以上「今の社会」において生きているということも否定できない事実である。ここらへんから僕の＜問題意識＞が出てきて＜ＦＩＷＣというサークル＞にかかずらわるということになるのである。つまり「ものそのものの世界」にある「僕の本体」がいかにして「ことばの世界」で生きてゆくべきか、あるいは別の言い方をすれば、常に変化している世界におりなおかつ、あらゆるものを固定化しょうとする傾向にある世界に生活してゆく中でどう生きてゆけばよいのかという問題。

それではＦＩＷＣとは何かといえばこれが又得体の知れないサークルだ。只、このサークルには何の規約もなく個人の（君の）やりたいことを最大限活用できる所であるということができる。ここには関西中の大学から、性別、思想、宗教を問わず、あらゆる人間が集ってきている。

ことわっておくが、キャンプと関わる以前から、こういう＜問題意識＞があって、＜のぞいてみた＞のではない。先にも書いた

が、イエローワークと、ここにある内容文に釣られてきたのだ。（性別、思想、宗教を問わずあらゆる人間が集ってきている）・サッカーと受験勉強のみといっても過言でないような高校生活の中で、「この世の人間はみんな、何か得体は知れないが、何かにおさえつけられ、各人の殻にとじこもって、あるいはとじこめられて生きているのであって、この世の悪はすべて人間の利己心から出ている。」というようなことを感じていたので、この文句を見た時、あらゆる人間が一堂の下に会し、和気合々と語り合い、和んでいる、素晴しい世界を思い、あこがれたのだろう。そして、つっと入ってしまった。そしてはじめてのキャンプ、その春のオリエンテーションへ行く道道、先輩のN氏から、「キャンプも反体制や。」というような話を聞いたが、反体制ということばも知らなかった、まさに、思想信条はもとより、知識さえも乏しい僕でさえ、FIWCに入り得たのであり、誰でも集まれるというのはうそではなかった。ところが、FIWCに関わって、良かったとも悪かったとも思ってはないが、困ることが一つできた。それは今でもそうなのだが、「FIWCって何ですか。」と問われた時、どう答えてよいかわからないことだ。文字通り＜得体の知れないサークルだ＞ということになり、これはちょうど、普通に使う意味での「この世界」つまり、地球上にあり、全人類から成り立っている世界について「この世界とはどんなものですか。」と問われたようなもの。「この世界」そこには、まず決りがない。変な言い方だが実際「この世界」はすべてに対する決りなんてないではないか。人が人を殺してはならない、そんな決りすら戦争というものによって、ないということがわかるし、原爆でも実際使われたではないか。また「この世界」に所属するための資格も「この世界」の一員であることをやめるための決りもないし、会費なんてもちろんない。いわば「ものそのものの世界」ではあるが、同時にまた、「ことばの世界」でもある。そこでは民族、人種とか言語等により、人間の集まり、を作り、あるいは人間が集まり、国という単位をつくり文明国といわれている国においては更に国の中も、地域別に区分され、すみずみまで、組織が網の目のように作られ、その各々の組織は、「ことばの世界」の代表格である法とか、規則によって、形づくられ、そこにあらしめられている。それらは政治権力という名の圧縮機械によって、形がくずれないよう、保たれているのである。まさに「ことばの世界」を中心としているのである。しかし、未開の地と呼ばれている地方では、「ものそのものの世界」の方が優勢なのではあるまいか、そして「この世界」には「ことばの世界」の色合いと「ものそのものの世界」の色合いの比率が1：99ぐらいから99：1ぐらいまで、いろんな割合の所があるのではなかろうか。（しかしこれは「僕のことばの世界」でつくりあげた「この世界」像であって、厳密な、いわば科学的な「ことばの世界」であって撮られた世界像ではない。）また、いわば「ものそのものの世界」に本体がありながら、多くの、

人間や動植物から無生物に至るまで、あらゆるものを、科学的に、人間にとらえやすいものとして「ことばの世界」でとらえ原理とか法則とかいったものをそこに見出し、人間の社会生活に大きな役割りを果してもいるのである。このように、先に、「僕自身」について「ものそのものの世界」と「ことばの世界」の二つの「土俵」の上に同時的にいると書いたが、「この世界」についても、「ものそのものの世界」と「ことばの世界」の二つの世界から同時に成り立っているのだと言える。（ことわっておくが、この世界像は、ここに文章として表現されたその時から、「僕のことばの世界」でとらえた「この世界」ということになるのであって、「ものそのものの世界」といってもそれは「ことばの世界」でとらえたものでしかない。）そして、ＦＩＷＣとは、「この世界」において、「僕自身」が同時にそれは複数の「僕自身」達が、お互いに、（「ものそのものの世界」に生きている者として同時に「ことばの世界」で）生活してゆくためにどうすれば「平和」に「幸福」に「自由」に「平等」に「進歩」と「調和」を保ちながら、生きてゆけるかということを実験的に探し求める「場」だと言えるし、そうでなければならないと思うのである。だからこそ、ＦＩＷＣには（何の規約もなく）個人の（君の）やりたいことを最大限活用できるところであるということができる）のである。変な言い方だがそこには、規約をつくってはならないという規約すらもなく、各人のやりたいことをまず第一にもってきて、無限に、「ものそのものの世界」の羽ばたきうる場をつくっているのである。そして、こういう場をつくりたい、こういう場にいたいと思うのは、「今の社会」でのまさに、実際の日々の自分の生活が「ことばの世界」を中心に動いていて「ものそのものの世界」の「僕自身」がかなりおさえつけられていると感じる。「ものそのものの世界」を人間はどのように感じる、あるいは、知るのかよくわからないのだが。）からこそであろう。そしてまた、（ここには関西中の大学から性別、思想、宗教を問わず、あらゆる人間が集まってきているのであるが）更に言えば、世界中の人間が自らをキャンパーと呼びうるのも、ＦＩＷＣが先のような「場」であるからであり、僕等が、おく面もなく International なる語を名称に持ちうる由であると思う。

さて、ここまでは、（ＦＩＷＣとは何か）と いうことについて、自分でもはずかしくなるくらいカッコよく、「僕のことばの世界」でとらえたことになるのだが、つまり「僕のＦＩＷＣ」を表現したことになると思うのだが次にそれが、実際に「この世界」において、ぼくの「問題意識」とどのように関わりあっているかということを書かねばならないと思う。しかし、そういったことも、「僕のことばの世界」でしか表現しえず、「この世界」においては、意識的にあるいは無意識的に「僕自身」の「ものそのものの世界」からの発源を大切にしようと思いつつ行動している「僕自身」にとってはある意味ではマイナスの影響を及ぼす、つま

り、今後行動する時、「ことばの世界・もののものの世界」といったことばが、行動の規準となるのではないか という恐れがあり、あるいはまた、そういった、いわば風化しかけた僕のことばの世界を越えて「もののものの世界」でもっと羽ばたけるようになるのでは、といったような期待もあり、だがまあ、こんなことをグダグダ考えている僕がくだらなく思え、次に進むことにする。

このサークルが他のそれと毛色が少し異なるところは、労働キャンプの名が示すとおり、キャンプをはったところで共同生活をするのだが、そして、その共同生活もめったやたらなところではやらない。日本広しといえども、その中で比較的問題の多い所（例えば、スラム、身体障害者施設等）で行う。

ここで僕の問題をもう一度、もう少し具体的に表現してみると、「もののものの世界」に抑圧されていると感じ、またそういった「僕自身」も「ことばの世界」で動きすぎていると感じる所から、もっともっと「もののものの世界」の僕として、「存在を許されたもの」としての僕として、この複数の「僕自身」達の世界「この世界」でどう生きればいいのかということになる。

そこで、いわゆるキャンプサイトでの生活から考えてみると、全く自分の外部からの規約による圧力はなく、やりたいことがやれ、同時に、他にも多くのそういう人達がいる時、その中で、なおかつ自分のやりたいことをやって行こうとすれば、他のすべての人を、僕の力でおさえつけ、僕のやりたいことの前には他の人のやりたいことをひっこめさせる、そういう世界をつくること。あるいは又、他の人との「つながり」により、その人のやりたいことの前に、僕のやりたいことを、僕の意志からひっこめるし又逆に、僕のやりたいことは、彼のやりたいことを納得でひっこめてもらった上でやるといった、そういう関係で成り立った世界が、いわば二つの両極のような感じで、すぐ浮ぶのである。そして前者のような世界への方向をもった社会として、歴史として、一般に語られている社会はあるのではなかろうか。あるいは、人間の歴史の中で、そういう向きに向いていたが、そこへの到達の無理というか、不自然さに気付き、若干後者の世界への向きをも指向しつつある民主々義とかいうことばが出てきているのが、今の社会ではなかろうかと思う。何故というに、公式的になるが、この前者の世界というのは、いわば「ことばの世界」全盛期とでもいい得る世界なのだから。そこでは、他の人々は、自分のやりたいことをやらせまいとする障害物であり、あるいは、自分のやりたいことの前には、屈服させられるべき大衆なのであって、そこには命のかよった一個の人間としての見方は、全くなくなり、同時に、相対的に、自分自身も、大衆の上に立つ支配人という形で存在するのである。そこで一方FIWCという場は、そういう学校で学ぶ歴史として語られている社会の向きとは相対的に逆の、後

者の向きに向かう場であろう。そこでは、ことばよりもまず、実感というようなものが重んぜられてきたようだし、例えば体制だの、権力だのということばでカッコよくしゃべる人に対して、軽蔑の念をこめたような感じで、おちょくるキャンパーが多いのもそういった一つの表われではなかろうか。また「心中」などということばも、わりとよく聞かれていたが、僕も、そういう方向性をもったＦＩＷＣの場というのは、まさに、その人に対して、自分の命をかけることができるというそういうつながり、人間関係をつくってゆくところだと思う。なぜというに、いわゆる「今の社会」での人間のつながりというのは、お金とか、スポーツとか、芸術とかその他様々なものがあろうが、そういった、媒介物を通してのつながりであって、相手の人と自分との間に常にその媒介物が一枚はさまっていて　両者でそれをおさえあって、ささえている間だけのつながりだろう。これでは、社会をささえるつながりは望みえないだろう。そこでＦＩＷＣの場でのつながりというのを、誤解をおそれず定義してみると、「偉大な生命のるつぼの中で共に個として『存在を許されたもの』としてのつながり」と言える。

ここでもう一つはっきりしておきたいが、ここまでの書きぶりでは、ＦＩＷＣの場では「ことばの世界」をすてて、「ものそのものの世界」中での社会（？）をつくろうとする場であるという感じがしてくるが、人間の中に、「ことばの世界」の源がひそんでいる以上それは無理だし、おかしいことである。しかし、とかく、「ことばの世界」が強い「今の社会」だから、相対的に「ものそのものの世界」への指向性ばかり強まるのは避けられないがその辺のことに関してもキャンプにおいて「労働」というものが意味をもってくると思う。ここで言う「労働」とはごくふつうに、働くと呼ばれる状態、あるいは、文字通り、人が動くことを、その中心とするようなもののことだが、この「労働」は「今の社会」を成立させる大きな力でもあり、「ことばの世界」を中心としていながらそれに骨肉をつけ加えている重要なものでもあろう。いわゆる文明国の、道路だの水路だのをつくっているのは、実際工事現場の土方なり、ブルドーザーの運ちゃんなりの労働なのだし、日本国民の食糧は、百姓の仕事によって、つくられているのである。だからあるいは逆に、僕が、働いた時、なんらかの形で必ず「今の社会」と関わらざるを得ないのであって、例えば、意図の有無にかかわらず、土方仕事をすれば、金がもらえるのであるし、「交流の家」の場合でも建築にあたってはお金が必要だし、建築道具や資材の多くは、大会社から、もらったり借りたりしているし、完成すれば、何らかの形で法的に規定されるべきものとなってくる。だから、極言すれば、労働キャンプとして、「労働」がある限り、「今の社会」とは別個の、「ものそのものの世界」を中心としたユートピアをつくろうとしても、無理なのであって、「労働」は、常に夢の世界に走りがちな、ＦＩＷＣの足を「今の

社会」にひっぱりつけておく役目を果していると言える。また同時に「労働」は、人間のつながりを求める上においても先の役目と同様大きな意味を持っていると思う。労働が今の社会であるように、社会的にいかなる意味なり役割りを持たされようとも働いている僕自身にとって、働くということは、「僕」と「スコップ」と「土」の共同作業であろうし又、「僕」と「生コン」と「バイブレーター」また「僕」と「パネル」と「かなづち」の世界なのであって、そこにはことばの入る余地なぞ全くないような世界であり「僕自身」が感じる、あるいはある世界であろう。そこでは、労働者、あるいは使用人、土方としての僕より以前に、苦しい、しんどい、手がいたい、そして完成した時のあのうれしさを感じる僕なのである。まさに、一個の生命として存在を許されたものというふうに、表現しうる世界であろう。だから、二人の人間がごく近くで働く時、両者がそういった世界でのつながりをもちうると、公式的に言えると思う。が実際、一緒に働くことにより連帯が生まれるとは、よう言わない。僕自身、一緒に働いて、つながりができたと感じたこともないし、又、それ以前に、つながりとか、連帯とかいうことばの内容がどんなものなのか又感じで、つかみうるものか、否なのかということも、わかっていないから。とまれ、「労働」は「ものそのものの世界」でのつながりの可能性を秘めているだろうし、又同時に、「今の社会」に、ＦＩＷＣをひきとめるという、実に重要な意味をもっていると思えるのである。そして、そこに、ワークキャンプが、毛色の少し異なるゆえんがあるであろう。しかし、〈他のそれと毛色が少し異なるところは……労働ということを含んだ共同生活をすることだ〉という点には疑問が生じてくる。「ことばの世界」と「ものそのものの世界」が相入れないままに共にあるという点に問題を見出し、その中で、人間と人間とのつながりを探し求めることが運動であるととらえた時、そこに共同生活の出てくる必然はないのである。〈このサークル〉という語がさし示すところのＦＩＷＣにおいては、その流れの上から、常に集団を組んでいた、そして、「問題」は施設等にも問題はある。たとえば精薄施設にしても、知能指数という数字で人間の頭を測定し、ある線付近以下の者は精薄と決められ、その者は、「その人自身」である前に、精薄者、施設の子供という形で規定され、「今の社会」から一線を画した施設といういわば閉鎖社会的での生活を強いられるのであり、そこは「ことばの世界」により「彼自身」を「今の社会」からおい出しているのであり、問題が典型的、集中的に表われた場だということもできるのであろう。しかし、その問題もことばの上でとらえることはできても、実際に僕自身の問題とならない時、僕にとっては、施設を（問題の多いところ）としてとらえる、とらえ方をする人間の方が切実な問題を含んでいるように思えるのである。施設それ自体、ライそれ自体は問題でも何でもないのであって、施設なり、ライなりに問題があるとする時、そこで接する人は、

施設の子供であり、ライ園の人なのであって、そういう接し方こそ差別の根、あるいは偏見の芽を含んでいると思うのである。一人の人間に対し、その人は一つのわくにはまった個体概念、代理人として、僕の頭の中に入ってくるのであり、当然、実際のその人自身、「ものそのものの世界」のその人とは一面異なった人間として、とらえられ、僕の「ことばの世界」の中で、いろんな役割りを与えられ、意味づけられ、働きをさせられるのである。これは、その人自身にとっては、文字通り、かたよった見方、偏見なのであろうが又、僕らは皆、人間として、「ことばの世界」でものをとらえる以上、人間はみんな偏見をもっているという言い方もあてはまるであろう。そして、あるものを又は人を「ことばの世界」でとらえた時、その「ことば」は、いろんな価値の基準により「ことばの世界内」で善悪、高低の区別がなされてくるのであり、それが、低いものをさげすむというような形で実生活に表われた時、差別するという行為になるのであろう。

このように、施設、ライ、あるいは又、沖縄、原爆等の中に問題があるのではなく、僕自身、人間その中に問題があると感じた時、そこからすぐ、集団というものは出てこないのであって、日々、僕のいる所、その場その場が、問題の所であり、運動の場だということになってくるのである。そしてそこでは、「今の社会」が「ことばの世界」を基軸にして動いているため、相対的に、どこまで、「僕自身」として、僕の世界で僕が主役となれるか、常に自分のいるその場を僕の世界としうるか、つまり、その場その場でどれだけ一生懸命になれるか又、その場その場で接する人とどこまでつながりうるかということが問題になってくるのである。言い変えれば、どこまで、「ものそのものの世界」で生きれるかということにもなるかもしれない。そして、そういった問題意識をもった日常生活というのはそれ自体、　決して運動ではなかろうが、それを「ことばの世界」でとらえた時、そういう問題意識をもった生活が僕自身を何らかの形で変えあるいは又、僕と接する人を又、相手との関係を変えてゆく時、それは運動と呼びうると思うのである。このように、僕の日常生活が、問題にとりくむ場となった時、日常生活それ自体が、ＦＩＷＣの場だと思えるのである。しかし、このことは　共同生活をする集団がＦＩＷＣではないということでは決してなく、共同生活にも、もちろん、いろんな意味がある。例えば、先のような生活を意識により場を変え作る運動という言い方をすれば逆に、場によって意識を変える運動と言えるし、共同生活で得られたつながりには、どこか趣味等の一致点にするつながりとは異なったものがあるし、また共同生活体に、素晴しい理想的な世界をつくり出す可能性もあるし、うらやましいカップルの生まれる例も多くある。（この最後の例に関してはもっと多くを書きたいが、今だ時至らず、力量不足のためやめる。）その他共同生活ならではの多くの点があろうが、今の僕にとっては、共同生活の必要性をあまり感じないし又、や

ったとしても、どうしても仮の生活という感じでしかとらえられないのであって、それよりは、生物学に励みつつ、その日常生活の中で問題を意識するということの方が切実なのである。そしてＦＩＷＣとは、この日常生活での運動と、共同生活による運動の両方を含んだ場であり、ちょうど、山や野で人が集まってキャンプをはるように、一人の呼びかけに対し、またある問題に対し、いつまでも共同生活キャンプが組めるそういうつながりをもった人間の集まりであろうし、あるべきだと思う。

現在は奈良市の郊外で、ライ回復者の社会復帰センターを、全くの素人だけの手で建設している。鉄筋コンクリート二階建てで、延べ七十坪の建物だ。素人だけの手で創ったものだから柱なんぞも曲っている。曲っていても決してこわれたりなんぞしない。なにせ六階建てのビルと同じ太さの柱を使ってあるからナ。

日常生活での運動とは言っても、自から、ＦＩＷＣを名のっているのだし又、ＦＩＷＣは社会的に見て、現在はライ回復者の社会復帰運動を唱えている以上、僕も直接ライに接するわけで、どこまでライを自分の問題として精一杯接することが出来るかということが問われてくる。そして実際僕の問題としては、いわゆるライ者と、どこまで、「ものそのものの世界」の人間としてつながりうるか、あるいは、ライだからというのではなく、それを越えて、どこまでその人に自分をかけることができるかということになるのである。ライ者と接する時、その人をライ者というとらえ方をすること自体、彼を「ことばの世界」でとらえることであり、差別の根をもっていると思う。といって、実際その人がライを病んでいる、あるいは病んだことがあるということは事実としてあるわけだし、そういう点で、他者とは異なった体験をもっていることも確かだけれど、だからといって、その人をライ者という言葉でとらえるのは、偏見の芽だと思う。あくまでその人自身が先立つのであって、その人に含まれるものとして、つまりその人が男であるとか、風邪を引いたことがあるというように、ライがあるにすぎないと思う。だからこそ、僕の接する一人の人として、どこまで　その人とつながりうるか、ということが問題になるのであるし、そういうつながりも又、社会復帰に欠かせない大きな力となりうるし、意味をもってくると思うのである。しかし一方では、ライ者であるが故に、親兄弟との縁まで切って、Ｔ氏の言うように故郷をつくられ、ライ園の中で生活してゆかねばならないという事も事実として現にある以上、それを全く無視することはできないであろう。そこで、先の、いわゆるライ者との、つながりを求めるということもある程度力となるであろうが、インドの癩学者が言ったという「らい根絶の要締は調査、宣伝、治療にある。」という言葉も、かみしめる必要があるだろうし、又今あるライ園のあり方を問題にする必要もあるだろうし、実際にライ回復者が社会に出て働く一助をすることも大切だろうと思う。

ところが、現在僕自身においても又、ＦＩＷＣ全体の運動としてもこういう面が、割と軽んじられているような気がして若干後めたいところがある。これは、こういう問題が切実感をもって迫らないということもあろうし、こういう問題にうちこむ余裕がないということもあるであろう。しかし、少くとも出来る範囲ででも最大限やっていく心要があると思う。

さて君、興味を覚えたらさっそく奈良までやって来てみたまえ。

それから読売テレビがこの前のキャンプの時に取材に来た、四月二十一日朝十時からのドキュメンタリー番組に放映するらしい。ぜひ見てくれヨ。

詳しいことを知りたかったら左記まで連絡してくれたまえ。

奈良市中町三九

「交流の家」

ＦＩＷＣ関西委員会

ＴＥＬ（奈良）四四ー〇七七六

ところで、ＦＩＷＣ関西には、ライ回復者社会復帰セミナーセンターと銘打った交流の家がある。そして、実際にそこはライをあらゆる方面からとらえる運動があり得るし、あるべきであろうが、僕の中では、オリエンテーションキャンプで初めて交流の家に行った時以来、ライと交流の家というより、ＦＩＷＣと交流の家という形での結び着きの方が強いようである。そして、交流の家は、集団としてのＦＩＷＣの具現したものとして、ＦＩＷＣの核のような感じでとらえられるのであり、だからこそ、共同生活ではなしに、日常生活の場での運動が可能になるような気もする。いかに各自が、あるいはグループが、てんでにいろんな所でいろんな活動をしていようとみんな交流の家を、自分の家として、くつろぎ得るし、もっともっと自分の家だという感じを持っていいのではなかろうか。そのためには交流の家が何らかの形で経済的に自立することが、意味を持ってくるが、その前に、僕自身、交流の家をどこまで自分のものにし得るかということがなるであろう。以上　交流の家のほんの一面的なとらえ方でしかないがこういうとらえ方もあるであろう。そしてこの文は、僕の交流の家に対する切実感の薄さを露見したようであるが又、この文を書いていて、これまでＦＩＷＣということばに対して、ＦＩＷＣ関西委員会のイメージしか持ってなかったように思えてきた。現在日本には、鳥取を含めて十一の委員会があり、友好団体と呼ばれているものも五つ程あるが　今後は、これらをも含めた形での運動の展開が考えられるであろう。

ＦＩＷＣ関西　四月行事予定

十五・六日　○交流の家にて

非暴力セミナー（アジアの平和と日本）

講師カカ・カレルカル博士
氏はガンジーの愛弟子で哲学者、塾の中心的存在

二十・二十一日
新入生歓迎オリエンテーションキャンプ（今回の作業は交流の家管理人住居の建設！）

二十六・七日
日本ライ学会で展示
於京都会館

二十九～五月一日
日本ライ学会記念
「ライ回復者社会復帰促進展」展示
於京都河原町三条朝日会館

さて最後に非暴力だとか、平和だとかいうことばが出て来たので、学生運動と、キャンプ運動とに関して、若干考えてみたい。僕自身、「ことばの世界」と「ものそのものの世界」からなる「この世界」で、いかなる世界を目ざし、いかに生きるべきかということが問題なのであり、そのためにＦＩＷＣの場は実に好都合なのであるが又、学生運動でいう現体制打破というようなことばも、あまりに「ことばの世界」から成り立っている「今の社会」を打ちこわし、「ものそのものの世界」を指向するものとして、割にすんなり理解できる。つまり、いろんな意味で、体制の抑圧ということばで、語られるところのものを感じるが、それらは「ことばの世界」で人間社会を律しようとするところから必然的に起ることのように思え、だからゲバ棒で「ことばの世界」の実際に形になって表われたものとしての「今の社会」その番兵の機動隊をたたきこわすのだという意味で　僕も同じ行動をとりたい時もある。しかし、「ことばの世界」は僕自身の中にすでにあるのであり、それは、なくしてしまうものというより「ものそのものの世界」と相補い合って一つの社会を創るものだと思うし又、機動隊員も、佐藤氏も、「ものそのものの世界」では存在を許された一個の生命体としてあるという感もあり、そこらへんの所も一つの問題として全共闘運動はなされてきたと僕なりに解釈している。だから僕自身、勝手に自分も全共闘だと思っているが、実際に、いわゆる、活動家と接した時、彼等の多くは、何の疑いもなく体制だの、反戦だの、連帯だのことばで語り、自らの行為も「ことばの世界」を基としたものが多いように思える。しかしこれは　政治闘争が主な活動となるため仕方ないような気もする。これに対しＦＩＷＣの場は、あまりに「ことばの世界」を無視するきらいがあるが、これも「労働」が活動の中心であるためかと思う。だから、運動体として、全共闘運動と、ＦＩＷＣを比べた時、それはどちらが先進的であるとか、どちらの方がよりラジカルであるといったような形ではなく、一方は「ことばの世界」の側から、そして相対的に他方は「ものそのものの世界」の側から、

その二つの世界の止揚された形の世界を目ざして進んでいると思えるのである。

ＹＴＶ四月二十一日　午前十時放映

制作・読売テレビ

出演・花のＦＩＷＣ

提供・ヤクルト

日本の目　'68「挫折なき運動」